棚板

袋棚の他、板にて略のもの也、休（千利休）が好みにて出來と云へり、四のはしらかぶら板のまとを除たると、又のけぬと二色あり、桐の白木、又薄塗も用ゆるなり、

洞棚（略○中）

洞棚は今井宗久の作にて、大林和尚ほら棚と名を付られしとなり、略間にもりつけ也、（略○中）

利休簞笥（略○中）

此簞笥は、小田原御陣の時持參と云々、中の棚をさきへおとすやうに去たると、又去つけに去たると兩樣あり、（略○中）

錢屋宗納、唐の組物の簞笥所持、是名物なり、茶簞笥に用ひて、常住座敷爐邊に置合たてられしなり、前に錠がまへありて、茶を立る時かぎにて開き、仕廻の時又錠をおとされしとなり、其後休公宗久抔も、又塗物唐の簞笥、右同前に用られしとなり、今も唐だんすまゝ有、みものなり

丸棚　休公好なり、千家に有之、（略○中）

よし棚（略○中）

卓

中央の卓は、天子四方を拜し、天を祭たまふ時、其臺を眞中に置て香爐を飾るなり、大小あり、漢和共に有事なり、四角か六角か八角か丸にても、前後左右廣狹なき物なり、少にても横長抔は、中央してはなし、常の卓にてあしらい替る事なり、中央の卓には置物等子細有事なり、秘事口傳、四疊半棚の座に置初し事は、志野流香方よりといへり、宗信門弟有巴茶をもたてゝ、風流の人なり、中央の卓置始しとなり、常の卓は形さまゞ〳〵あり、難記、

〔長闇堂記〕一今の世卓、大小さまゞ〳〵有、是を遠州（小堀政一）好出給へり、昔志野が香聞し棚など見給